CN-1 軽度低体温療法中における口腔内洗浄の有用性について

船橋市立医療センター集中治療室

烏田由美子　矢花明子　新山文代　上井英道　境田康二

【はじめに】当施設では平成 6 年より心肺停止蘇生後及び頭部外傷患者を対象に脳保護を目的とした軽度低体温療法を施行している。一般的に感染発生率が高いと言われている軽度低体温療法施行中の患者に対する口腔内洗浄について平成 9 年に実態調査（第 24 回日本集中治療医学会において発表）を施行、その結果として看護婦の手技は統一出来ているが消毒液の濃度が一定でないことと口腔内洗浄回数の不足が示唆された。そこで、今回消毒液の濃度と口腔内洗浄回数を取り決め調査したので報告する。【目的】軽度低体温療法施行中における消毒液の濃度と、洗浄の回数を取り決め行った口腔内洗浄の有用性を検討する。【対象】軽度低体温療法を施行した平成 7 年 1 月 1 日から同年 11 月 30 日まで ICU に入室した患者 18 例を前期群とし、平成８年２月１日から平成 11 年１月 31 日まで ICU に入室した患者 22 例を後期群とした。【方法】両群において ICU 入室時、及び入室後 1、2、3、5 日目に咽頭培養を施行した。前期群では統一されていなかったイソジンガーグルの希釈濃度を後期群では 15 倍（イソジンガーグル８ml、水 120ml）に統一し、口腔内洗浄回数を 1 日 3 回と取り決めた。【結果】①咽頭培養陽性例は ICU 入室後 2、3 日目は両群で同数であったが、入室後 1、5 日目は後期群のほうが少なかった。②初回口腔内洗浄を実施するまでの時間は後期群のほうが有意に短かった。③軽度低体温療法中に咽頭培養が陰性であった患者は前期群 3 例に対し、後期群 7 例だった。性別や低体温療法施行時間などに有意差は見られなかった。【考察】当 ICU は術後の予定入室患者と救急による緊急入院患者を受け入れている病棟である。そのために業務上、口腔内洗浄にとりかかる時間は決定されていなかった。また、軽度低体温療法を施行する患者は ICU 入室後、様々な治療処置を行なうため、その結果、前期群では初回口腔内洗浄を行うまでかなりの時間を要した。しかし、前期群での咽頭培養結果より ICU スタッフが早期に口腔内洗浄を行なう必要性を感じ、後期群では早期に口腔内洗浄を実施しようと心がけた結果、有意に短くなったと思われた。これは軽度低体温療法を施行する患者の口腔内洗浄に対する意識向上の結果だと考えられる。①の結果について、まず後期群で咽頭培養陽性例が ICU 入室後 1 日目に少数であったのは、初回口腔内洗浄が行われる時間が有意に短かったためであり、このことから、入院後早期に口腔内洗浄を実施することは重要だと思われた。しかし、両群で ICU 入室後 2、3 日目に咽頭培養が陽性であった患者が同数であったこと、③の結果である後期群での軽度低体温療法中の咽頭培養が陰性であった患者が 7 例と前期群より多かったことから考えると、1 日 3 回の口腔内洗浄回数と今回の消毒液の濃度はある一定の効果を得ることが出来たが、まだ充分とはいえるものではなかったと思われた。軽度低体温療法を受ける患者は、意識消失時や蘇生時に嘔吐、誤飲している可能性が高いために口腔内の汚染が考えられる。また同療法施行中は人工呼吸器下での鎮静剤、筋弛緩薬を使用していること、さらに胃管こそ挿入されているが、腸蠕動運動低下のために逆行性に細菌が移動する恐れがある等のことより、症例に応じて口腔内の洗浄回数を増やすなどの変化を加える必要があると思われた。このような患者の口腔内の清潔保持は看護婦の手に委ねられており、今後も症例を重ね検討していきたい。【結語】1. 低体温療法を施行する患者では、入院後早期に口腔内洗浄を実施することにより咽頭培養陽性例を減少させた。2. 口腔内洗浄回数と消毒液濃度を統一して行うことは、咽頭培養陽性例を減少させる可能性がある。3. 個々の症例に応じた口腔内洗浄の工夫をする可能性があると思われた。